

English Garden 第94話

"All phases of my life have been focused on world peace and understanding."
Edwin O. Reischauer

「私は生涯、世界の平和と理解を中心にすえて生きてきた」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの9回目(最終回)です。この言葉は、彼の自伝のエピソードの一部です。

1966年夏、ようやくワシントンがライシャワー大使の辞任を認め、そのニュースを発表すると、日本の新聞には夫妻の功績をたたえる大きな記事が一同に掲載されました。イギリスの「ロンドン・タイムズ」までが社説に取り上げて「アメリカの歴史の中でもっとも業績をあげた大使の一人」と賞賛し、「日本の歴史について造詣の深い彼は、電話が発達し、首相が飛行機で飛ぶ時代になっても、大使の役割は決して小さくはならないことを証明した」と述べています。

天皇陛下(昭和天皇)からは、「あなたは政治上のアメリカ大使を辞めるのだから、これからはアメリカ駐在の日本の文化大使になってください」とのお言葉がありました。大学教授として再び日本について教えるエドウィンにとってはびびったりのジョーク、平素は謹厳な陛下のにこやかなお顔が目に見えるようです。

帰国後はハーバード大学に戻り、翌年から授業を再開しました。そのころハーバードでは、東アジア研究は主要な重点研究のひとつとなっていて、学生の数も増えていました。

この年、大統領選挙の運動が始まり、エドウィンはロバート・ケネディに出馬を要請した関係で選挙運動にもかかわることになりますが、予備選挙の当日、ロバート暗殺の悲報を受けました。またしても大きな衝撃で、「彼の死ほど悲しく、落胆した事件はなかった」としみじみ語っています。

1968年、CBSテレビが日本についての特別番組を作るというので、帰国後初めて来日しました。それ以来、テレビ番組作成のための協力や種々の会議のために、来日する機会が多くなりました。1973年にはハーバードに日本研究所が設立され、所長になりました。これは日本研究のための資金を集めるという目的もあったそうです。

1974年、佐藤栄作首相がノーベル平和賞を受賞したのは、ライシャワー氏の推薦の力が大きかったというエピソードもあります。この受賞には日本でも多くの人が首をかしげたものですが、エドウィンには次のような推薦理由がありました。「日本人は第二次世界大戦後、一貫して平和を支持してきた。日本人というグループに受賞できないなら、長いあいだ首相をつとめた佐藤は、国民の代表として平和賞を受ける資格がある」

このように、充実感のあるきわめて多忙な日々を送っていたところ、1975年に脳卒中を起こし、言語障害が残って日本語がうまく話せないようになりました。幸い書くことには支障がなかったので執筆に力を注ぎ、「The Japanese」(日本語版「ザ・ジャパニーズ」)を出版、ワシントンでは数週間のうちにベストセラーになりました。日本でも日本語版がよく売れました。

1980年、エドウィンはハーバードを定年退職しました。

1983年4月、青年社長会議に出席するために来日したところ、会議の終了後3度目の脳出血で倒れました。1週間意識が戻らなかったのですが、そのあいだに、はっきりした日本語で演説をして看護婦を驚かせたそうです。翌月アメリカに戻り、秋には病氣も回復して、それ以後も自伝をはじめ日本や韓国で発表するものを書き続けていました。ハル夫人も自伝的な物語「Samurai and Silk」(「絹と武士」)の執筆を続け、1986年に出版しました。

1990年(平成2年)9月、エドウィンは何度か入退院を繰り返したのち、79歳で永眠しました。3ヵ月前に延命拒否のサインをし、2日前にみずから望んで生命維持装置をはずしての尊厳死でした。

なお、エドウィンは日本学士院客員に選ばれており、外国人に与えられる最高の荣誉である勲一等旭日章を受けています。

20世紀の日本の歴史と、ライシャワー氏の運命的とも言える生涯を重ね合わせてみると、戦後のあの時期にライシャワー大使を迎えたことは、日本にとって実に幸運であったと、つくづく感じます。氏には日本に対する大きな愛と深い知識、卓越した洞察力に加えて、アメリカ政府においても大統領と対等に意見を交わせる大きな政治力がありました。真に日本の立場を代弁してくれた大使ということができるといえるでしょう。

エピソードの中でエドウィンはそれまでの人生を振り返り、公職についたために「包括的な日本通史」と西歐的な見方に偏らない「バランスのとれた世界史」を執筆する機会を逸したことが心残りであると、学者としての本音をもらしています。しかし、自分の一生が一貫して日米の相互理解のために捧げられたことに満足し、いまやその関係は揺るぎないものになったと、力強くしめくっています。

彼の筆になる日本史や日本人論には深い洞察力があり、教えられる面が多々あります。時代と共にライシャワーの名前も次第に遠いものになっていきますが、こういう生涯を送った人のあることを広く知っていただきたいと思い、長い連載になりました。長期にわたってお付き合いいただき、ありがとうございました。

(完)

参考文献(連載中に触れたものすべてを掲載):

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York

"Japan Past and Present" Edwin O. Reischauer, Charles E. Tuttle Co. Publishers, 1964(この書は後に改題して"Japan The Story of a Nation"となる)

「ライシャワー自伝」エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年

「ライシャワー大使日録」エドウィン・O・ライシャワー／ハル・ライシャワー著、入江昭監修、講談社、1995年

「ライシャワーの日本史」("Japan The Story of a Nation")エドウィン・O・ライシャワー著、国弘正雄訳、文芸春秋、1986年

- 『ザ・ジャパニーズ』エドウィン・O・ライシャワー著、国弘正雄訳、文芸春秋、1979年
『日本への自叙伝』エドウィン・O・ライシャワー著、大谷堅志郎訳、NHK取材班構成、日本放送出版協会、1982年
『円仁 唐代中国への旅』("Ennin's Travels in T'ang China") E・O・ライシャワー著、田村完誓訳、原書房、1984年
『私の歩んだ道』ハル・ライシャワー著、主婦の友社、1966年(インタビュー記録)
『絹と武士』ハル・松方・ライシャワー著、広中和歌子訳、文芸春秋、1987年

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。